



学内のカフェテリアやバブで本やノートを開いている人もいれば、授業が終わるとさっさと車で自分達の生活にもどっていく人もいる。図書館は平日、日曜は夜中の十二時（土曜は六時）まで開館している、静かに勉強したい学生には大変ありがたい。けれどもこの図書館も金曜、土曜の夜はガラガラ。彼らは週末にはやはり勉強をはなれるようだ。スポーツ施設も多くの人に開放されており、冬はスケート、水泳、スカッシュ、バスケット、冬以外はフットボール、テニス、ジョギングと、自然と環境に恵まれたカナダの学生はのびのびと楽しんでいる。

夏休みは実質四カ月以上あり、多くの学生は仕事をし、受験勉強から解放されて大学にはいると途端に気がゆるみ、自由を享受する日本の学生とはちがって、彼らはいくつかの有名なファカルティーを除いては、大学についての憧れも負いもなく、また遊びに明け暮れることもなく、勉強、娯楽、仕事といった担々と個人の生活を大切にしている感じがする。



「青春のエッセンスが詰めこまれた」大学というイメージよりも、ハイスクールから実社会へのトランジットの場として大学を見る彼らは、学資もできるだけで分て稼ぐのを当り前と考え、大学にコミットせず、自分の責任で生活設計をたてていく個人主義者といえよう。

現在の彼らの関心は、大学新聞から判断する限り、カナダ経済を反映する大学の子算削減と、就職難があげられる。カナダの失業者数はおよそ百万人というところであるが、夏期だけの学生の失業率は一五パーセントと、学資のために働かざるを得ない学生にとっては深刻。彼らは就職に関しては、大学をあまりあてにできず、各自で応募する。したがって、就職に関しては敏感にならざるを得ない。

もちろん、コンピューター・サイエンス、エンジニアリング、医科系、Law School など実務むきの学生には、この就職難もたいして縁がないようだ。学生も目先のきく者は、実社会にでて有利となる、少なくとも就職のための武器となる分野を

選ぶようで、ここにも北米社会の社会構造と人間観があらわれている気がする。

学生の評価のひとつの基準として、成績を別にして、いかに活動的であるかということがある。就職応募のための履歴書にしても、クラブ活動を始め、夏休みをいかに働いたか、どのような調査、研究を残したかなど、できるだけ多くの項目をならべられるようにすることが、ひとつの戦略的ポイントである、とある人は言っていた。授業においても、面接にしても、いかに自分をうまく、適確に表現するかは、ひとつの技術以上に、彼らの目的となつているような感じを受ける。各人が声を大にして自己の主張をすべきこの社会で、時代の動きを読みとり、適応していく彼らのものの考え方の積極性とエネルギーには共鳴するが、一方で坦坦と人と人との間をぬっていき生き方に、何かもの足りないものを覚え、時に外にあらわれる活動性とは別に、人間理解に関する精神的幼なさ、単純さを感じるが、これは私の価値観によるものかもしれない。

小松左京氏がある本の中で、カナダのことを「白き巨大な国」と表現されていたのをふと思い出したが、若き国カナダの学生は、カナダの国柄にも似て、決してアグレッシブでなく、調和することを知っているように見うけられる。景気後退とはいえ、豊かな資源と自然を背景にしたカナダの学生は、やはり総じて大学環境に恵まれていると思う。この彼らに個人主義を超える力強さが加わった時、カナダも一段と伸びるのではないだろうか。

### 働きながら学ぶ辺境の成人学校 カナダの国内版「平和部隊」

カナダには辺境が多い。都市から遠く離れて点在する、数知れぬ小さな漁村や山村、あるいは鉱山村。さらにまた水力発電所の工事現場や鉄道員だけの小さな小さな村。それに木材の切出しキャンプ……。

そういうところで働く人たちの中には、外国から移民としてやってきたり、あるいは正規の教育を受けたことのない場合が多い。彼らにも勉強の機会を与えよう———ということ、カナダ各地で、おそらく世界でも珍らしい、働きながら学ぶ「フロンティア・カレッジ」が開かれている。

このような学校ができたのは一八九九年。当時オンタリオ州北部の木材切出し場で説教していたアルフレッド・フィッツパトリック牧師が、州政府や経営者の協力を得て、山小屋に新聞、雑誌、本を持ち込んで読書普及運動を始めたのが発端である。

運動はだんだん大きくなり、一九〇二年には若いボランティア教師が辺境に入り込んで昼間は労働者と共に働き、夜は彼らに読み書きを教えるようになった。現在では、若い男女や夫婦、あるいは引退した人たちが、ビデオ紹介、図書貸出し、法律や健康相談、経営相談、地域の組織作り、社会開発計画など、地元と密着した活動を行っている。一九七七年九月、フロンティア・カレッジは、成人のための読み書き教育が認められて、国際的なモハメッド・レザ・パーラビ賞を授与された。